郷土ちがさき

湘南の青空を舞う大凧のように
日本の空を駆ける茅ヶ崎郷土会でありますように　　願いを込めて
（写真　前田照勝）

第 138 号
発行　平成29年1月1日
発行所　茅ヶ崎郷土会
会長　　青木昭三
編集責任　平野文明

年頭の挨拶　茅ヶ崎郷土会会長　青木昭三　……1
二七五回史跡めぐり　……2
二七六回史跡めぐり　……3
参加者の声　……4
会員投稿　……7

年頭の挨拶

茅ヶ崎郷土会　会長　青木昭三

謹んで新春の御祝詞を申し上げます。

会員の皆様におかれましては、ますますご壮健にてよいお年をお迎えのことと推察申し上げます。

さて、新年にあたり昨年一年を振り返ってみますと、総会前の大岡越前祭に「大岡越前守遺跡写真展」の開催、秋の文化祭には「相模国の修験道の聖地を訪ねて」の写真展を開催いたしました。どちらも盛会裡に終了いたしました。

史跡巡りと勉強会も年間の事業計画に基づいて実施し、参加者も増加し、一般市民からもご好評をいただいております。

また、茅ヶ崎市郷土芸能大会も第四十四回を迎え、十一月二十七日に盛大に挙行されました。郷土会の理事が全面的に協力し盛会裡に終了しました。

これもひとえに役員理事の方々のお骨折りのたまものであり、深く感謝申し上げます。

結びになりますが、会員の皆様方のご健勝とご多幸をご祈念申し上げます。

本年も昨年に倍しご指導ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

以上はなはだ簡単ですが年頭の挨拶といたします。

平成二十九年元旦

特集　茅ヶ崎郷土会の史跡めぐり

「史跡めぐり」は茅ヶ崎郷土会の主要事業の一つです。都合で順番を変えることもありますが、ひと月おきに市内めぐりと市外めぐりを行っています。

市外めぐりの二十七年度は「相模国修験道の聖地を訪ねて」をテーマに大山、箱根、八菅神社（愛川町）、量覚院（小田原市）などをめぐりました。今年度は「相模のもののふたち」をテーマに衣笠城址（横須賀市）、城願寺・石橋山（湯河原町・小田原市）などをめぐっています。この市外史跡めぐりは平成二十八年十二月までに二七七回を数えました。そして、市外めぐりで勉強したことを、秋に行われる茅ヶ崎市文化祭に展示し公開することを数年続けています。

ここに特集を組んで、「三浦一族と衣笠城址」（二七五回　七月実施）と「土肥実平と石橋山」（二七六回　九月実施）の様子と、参加者の文章を掲載します。同行の際の喜びがあふれています。これらを読まれて、「自分も行ってみたい」と思われる方が現れるといいなあと思っています。これは編集員一同の願いです。

会員外の参加も歓迎です。今後の予定は最終ページにあります。

第二七五回史跡めぐり

平成二十八年七月五日（火）参加者　十六名

相模のもののふたち（№２）

衣笠城址と三浦一族（横須賀市）

西　輝　幸

今回は横須賀市衣笠の衣笠城跡や三浦一族ゆかりの社寺を巡った。三浦一族は桓武平氏の子孫、村岡為通が源頼義に従い、前九年合戦（一〇五一～一〇六二）に参戦し、その恩賞として与えられた所領の地名を氏とし、名乗ったのが始まりと伝えられている。

三浦氏は為通（諸説あり）―為継―義継―義明―義澄―義村―泰村と七代続いたが、宝治元年（一二四七）、泰村が北条時頼との勢力争いに敗れ、一族郎党五百余名と鎌倉の法華堂で自害して滅びた。

茅ヶ崎駅から電車に乗り、大船駅で横須賀線に乗り換えて衣笠駅で下車。最初に行く衣笠城跡は急な坂道があり、暑さも考慮して駅前からタクシーに分乗した。①

衣笠城跡は城跡といっても、平安・鎌倉時代の山城（やまじろ）で、石垣や天守閣はない。この城は源頼義に従って前九年の役に出陣した村岡平太夫為通が、戦功によって所領とした三浦の中心地である要害堅固のこの地に、康平年間（一〇五八～一〇六四）に築城され、以後、為継・義継・義明の四代にわたり三浦半島統治の中心であった。治承四年（一一八〇）八月、源頼朝の旗揚げに呼応し、この城に平家側の大軍を迎え、その攻防戦は「衣笠合戦」として名高い。攻防一日、戦況の不利を悟った義明は、わが子義澄に生き延びて頼朝に忠誠を尽くすよう勧め、安房に脱出させ、自身はこの城で討ち死にした。

現在ある衣笠城跡はその後、宿敵北条氏に対抗するため、鎌倉時

代後期に大改造された。その後三浦氏は宝治元年（一二四七）鎌倉で滅ぼされた。衣笠城跡は昭和四十一年六月、横須賀市指定史跡になっている。

城跡内に大きな物見岩があり、大正八年、この岩の下から、経筒その他が発見されている。ここから少し下がると**②大善寺**がある。曹洞宗で金峯山不動院大善寺と称す。僧行基が天平元年（七二八）に建てた。本尊は箭取（やとり）不動と呼ばれている。また行基によって開かれ、衣笠城の重要な生活用水の泉が不動井戸と呼ばれ、同じ境内にある。

坂道を下り、さらに進むと**③満昌寺**がある。鎌倉幕府初代将軍源頼朝が鎌倉幕府創設の礎となった三浦大介義明の功を称え、追善のため建久五年（一一九四）に創建。創建時の宗派は未詳であるが、現在は臨済宗建長寺末寺。本堂内には本尊の華厳釈迦如来像（市重文）、開山仏乗禅師天岸慧広坐像（市重文）、御霊神社内に三浦大介義明坐像（国重文）がある。少し行くと**④近殿（ちかた）神社**がある。祭神は三浦義村で、ご神体は高さ一尺ほどの義村の木像が安置されている。大矢部の総鎮守。この神社の境内の日陰で昼食と休憩をとった。

休憩後、この神社の東側すぐ近くにある**⑤薬王寺旧跡**に立ち寄る。和田義盛が父の杉本太郎義宗と叔父の三浦義澄の菩提を弔うため、建暦二年（一二一二）建立。明治八年（一八七五）廃寺となり、大正三年（一九一四）焼失した。薬師如来像は満昌寺に祀られている。跡地には現在、石碑が建っている。大通りに出た反対側に**⑥青雲寺**がある。三浦義継の供養のために建立された。現在の本尊である木像観音菩薩坐像（滝見観音・国指定重文）は、元、円通寺の本尊で三浦為通が授かった。元々の本尊である木像毘沙門天立像（県指定文化財）は、和田合戦（一二一三）の折、和田義盛の身代わりになって敵の矢を受けたことから「矢請けの毘沙門天」といわれ、運慶の系統を引く鎌倉時代の仏師の手によるものとみられている。本堂の裏には市指定史跡「伝三浦為継とその一党の廟所」がある。三浦氏三代の墓と和田九十三将のものと伝えられる五輪塔があり、隣接して葦名盛信の銘の板碑がある。本日の史跡めぐりはここで終了し、バスで衣笠駅に戻り、横須賀線、東海道線と乗り継いで茅ヶ崎駅に戻り解散した。

第二七六回史跡めぐり

平成二十八年九月二十八日（水）参加者十九名

相模のもののふたち（№３）

土肥実平と石橋山（湯河原町・小田原市）

源　邦章

今年度の史跡めぐりのテーマ「相模のもののふたち」も三回目を迎えました。源頼朝は山木館襲撃により旗上げが成功しましたが、その直後三浦氏を頼って相模に入ったところ、総大将大庭景親率いる平家軍と戦った石橋山古戦場及び敗れて安房に逃れるまで頼朝を助け続けた土肥実平の館跡を湯河原に訪ねました。

集合場所の茅ヶ崎駅を出発し、東海道本線で湯河原駅へ向かいました。駅を降りるとすぐ左側に**①「土肥実平夫妻の像」及び「土肥氏館跡碑」**が建っています。後で訪れます

「石橋山古戦場」で敗れた頼朝が数日間、何回となく九死に一生の危機に追い込まれましたが、それを地元の土肥実平が献身的に助けました。さらに、その頼朝一行が逃避行を続け、洞窟に隠れたり、地蔵堂に隠れたりした時、実平の妻女が危険を顧みず水と食糧を運び一行を助けました。その実平夫妻の像が湯河原駅前に建っています。その隣にはこの土肥実平の館が、当時はこの駅前からこれから行きます成願寺辺りまであったと、この館跡碑には書かれています。

両方の碑を見たあと成願寺へ向かいました。湯河原駅より徒歩十五分位、駅の裏にありますが、かなり迂回してたどり着きました。**②成願寺**は土肥実平の菩提寺で、土肥一族の墓と言われる五十基ほどの五輪塔などがありました。境内には実平手植えの樹齢八〇〇年と言われるビャクシン（国の天然記念物）や七騎堂が有りました。

湯河原の駅に戻り東海道本線で二駅目根府川駅よりバスで石橋山古戦場へ向かいました。バス停「石橋」で降りて山道を歩くこと十五分、**③佐奈田霊社**に着きました。石橋山合戦の折、頼朝方の佐奈田（真田）与一義忠と敵将大庭景親の弟、俣野景久の一騎打ちとなり、一度は景久を組み伏せましたが、この一騎打ちの前に義忠は敵を倒し首を討ったとき血糊を拭わずに刀を納めたので、血糊が刀の鞘に詰まって刀を抜けず、景久を討ち取ることが出来なかった。そこへ俣野の家来の長尾新六が駆けつけ与一義忠は無念な最後を遂げました。その佐奈田与一を祀ったのがこの佐奈田霊社で、一説には景久を組み伏せた時、急に咳きこみその為に景久を討つことが出来ず、逆に討ち取られました。そこから、この佐奈田霊社は喘息に対して霊験あらたかな神社として知られたとのことです。（喘息の為に討たれたので逆だと思いますが）その佐奈田霊社を巡る周囲が石橋山古戦場で佐奈田与一が討たれたあと、雪崩をうって頼朝軍は敗走しました。その後、**④ねじり畑**、**⑤文三堂**を見て、バスで早川駅に行き早川駅近くの**⑥小田原漁港の食堂**で遅い昼食を食べて、茅ヶ崎駅へ戻り解散しました。

因みに早川も土肥実平の領地で、のちにその一族が小早川となり中国地方に土着、戦国時代毛利家を助ける小早川家となりました。

二七六回史跡めぐり　参加者の声

曇天で蒸し暑い日でした

しかし、海の彼方に房総半島が見えました。当時の頼朝や土肥実平達もこの景色を見ながら、小舟で房総に脱出したかと思うと、遠い歴史上の出来事が少し身近なことのように感じられます。生き延びて、後の世に名を馳せた者も、彼らのため討ち死にした者も、みな真剣に生きていたのだなと思いました。

たくさん歩いた後の昼食は、小田原漁港の食堂で。まるで『競り』みたいに元気なお姉さんに食券を渡し、新鮮な刺身定食をいただくと、歩き疲れは見事に吹っ飛びました。

（山崎まゆみ）

皆急げ

○後ろから、ミカン畑にときの声
○御駄餉（ごだしょう）を持って、どこへ行くのか実平の妻
○腹へった、実平の妻の御駄餉、まだ来んか
○御駄餉はもう届けたと永実言い
○早なりの、ミカンの実の間（ま）に景親が…
○血刀が、抜けぬ与一もひと休み
○皆急げ、次はメシだと武衛言い（武衛とは頼朝のこと）
○荒海に七かばちかの七騎落ち　（石橋山でフーテンの熊　詠む）

（編集者注　「御駄餉」は弁当のこと。「フーテンの熊」さんは会員です）

昔、教科書で習った場所に

湯河原で土肥実平と妻の像を見て、城願寺にお参りしてから、相模湾沿いにバスで移動し、古戦場に向かっている辺りから、昔、歴史の教科書で習った鎌倉幕府の成立に深く関連する場所に、実際にきているのだと強く感じられた。これまでは鉄道ですぐそばを通り過ぎるだけの所にすぎなかった。源さんに率いられ石橋山に向かっていると、もしや一旗揚げる企てがあるのかもしれないとの妄想が膨らんで来るような気もした。右手の相模湾を頼朝は小舟で何とか安房に逃れたというが、海には静かに波が寄せるだけであった。

ところで、伊勢原市岡崎に二年ほど住んでいたので、岡崎義実のいた城跡を見てはいたし、近くの平塚市北金目には真田神社があり真田与一が祀られていることは知っていた。それが、この石橋山と深く結びついていたとは、この日初めて知ったことである。

石橋山にある佐奈田霊社で気付いたのは、東京方面の地名が入った石碑があちこちにあり、そこに「講」と刻まれていたことであった。後日、ネットで検索してみると、小田原史談会の「美声を欲せんとすれば佐奈田飴　1～9」というサイトが見つかった。そこには、喉の病気に霊験あらたかで、良い声をもたらす神様として信心され、東京（＝江戸）方面からも鳶職の団体がお参りに来ることをはじめとして、興味深い事実がいくつも記録されていた。鳶職は木遣りを唄うので良い声を願って参詣するとあったが、講がどう始められ、その後どんな変化が生じてきたのか知りたくなった。このサイトに載っている話だけでも、かつては非常に賑わい、今でも参詣者が絶えないようだ。見かけだけではそんな神社とは想像できなかった。今回の史跡巡りで新たな知識が得られたことに感謝したい。

また、巡る途中の解説で、文献に記されていることは事実か、「～と伝えられている」ことをどう受けとめるかをつねに問うことの大切さが説かれていた。歴史の現場の地形や自然と、地域の語り伝えにふれると、この地域がずっと身近になってきた。

それには、今回の解説の一部として平野さんにより分かりやすく『吾妻鏡』の石橋山合戦の辺りが朗唱されたことが、今回の史跡巡りを楽しくする大きな効果をもたらしたと思っている。そのおかげで、気持ちが少し鎌倉時代に入りこんだのかもしれない。

この日は、少し暑いくらいであったが、雨にも降られず、よく歩くことができた。最後に、小田原漁港の賑わう食堂で遅い昼食をおいしくいただいた後、早川駅に向かう際に雨が少々パラついて、ようやくふだんの気分に戻ったようであった。

楽しい史跡巡りができたことに感謝したい。

（小川正恭）

七騎落

〈頼朝〉（〈　〉はせりふの主）　これは（自分は）右兵衛佐（うひょうえのすけ）、頼朝なり。さても昨日、土肥の杉山の合戦にうち負け、味方 あまりに無勢に候ほどに、ひとまず西国の方へ開かばやと（落ちようと）存じ候。いかに実平（実平どう思うか？）。船を用意つかまつり候へ。

〈実平〉　御前（おんまえ）に候。はやお船を用意つかまつりて候。急ぎ御船に召され候。

〈頼朝〉この船中に供したる人数（にんじゅ）はいかほどあるぞ。

〈実平〉ただ七騎ござ候。

〈頼朝〉さては（それなら）頼朝までは八騎よな（自分も入れれば八騎だよな）。

思い出せる事あり。祖父 為義、鎮西を開きしも（九州に逃れたときも）主従八騎、父 義朝、尾張の国へ落ちしも八騎、思えば不吉の例（八騎は不吉だ）なり。実平、計（はか）らいとして、船より一人おろし候へ。

実平仰せを承りて、船のせがいに立ち上がり、御供（おんとも）の

人数を見渡せば、

〈実平〉 まず一番に田代殿、さて二番には新開（しんかい）の二郎、また三番は土屋の三郎、四番は土佐坊、五番には実平候、六番には同じく遠平、艫板（ともいた）には義実あり。

頼朝が石橋山で大庭景親の大軍に敗れたのは治承四年（一一八〇）八月二十三日だった。

湯河原土肥郷・石橋山探訪の折、城願寺の境内で、「山中を逃げ惑った主従はもっと大勢いたろう、七騎じゃなかったろう」とか、「船で海を渡ったのも七騎じゃなかったろう」などと話した。

知らずに話していたのはうかつだったが、帰宅して調べてみると、寺の七騎堂の前に説明看板が立ててあって、七騎とは謡曲「七騎落」に基づくとちゃんと書いてあったのだ。先に紹介したせりふがその謡曲の冒頭部分である。船で脱出しようとしたとき八騎いた。ところが祖父と父が落武者となったときは八騎だったので、ここで自分も加えて八騎で落ちるのは不吉だ、一人船から降ろせと頼朝が実平に命じる場面である。

城願寺の七騎堂

謡曲に出てくるこの七騎というのはどんな人物なのだろうか。そこで『吾妻鏡』に彼らが最初に登場する様子を調べてみた。謡曲の順に記すと次のとおりだった。

田代信綱　寿永三年（一一八四）二月五日、一の谷合戦の義経の軍中に名がある。

新開荒次郎　工藤祐経を討ち、さらに頼朝を襲おうとして捕らえられた曽我五郎時致（ときむね）を、建久四年（一一九三）五月二十九日、頼朝の命によって尋問した。

土屋三郎宗遠　治承四年（一一八〇）八月二十日、伊豆を出て土肥郷に向かう四十六人中に名がある。土肥実平の弟。

土佐坊　元暦元年（一一八四）八月八日、駿河守源範頼が平家追討使として西海に赴く一軍の中に名がある。その後、頼朝の命に応じて義経暗殺を志願し、文治元年（一一八五）十月十七日、義経の六条室町の屋敷を襲うが失敗し、同月二十六日捕らえられ、六条河原で梟首（きゅうしゅ）される。

土肥実平　謡曲『七騎落』のシテ（主役）。

頼朝は山木兼隆を討って旗揚げする密議を治承四年（一一八〇）八月四日におこなうが、そのときの一人として登場。同月二十日の伊豆国出立（しゅったつ）の四十六名中に見え、石橋山の負け戦では山中を案内しながら頼朝に付き従った。

土肥遠平（とおひら）　実平の息子。伊豆出立四十六人中に名がある。

義実　岡崎四郎義実　三浦義明の弟で、前記した八月四日の旗揚げ密議に参加した一人として登場。石橋山で壮絶な戦死をとげた佐奈田与一義忠は長男。もちろん伊豆出立四十六人中に名がある。『七騎落』では重要な脇役を演じている。

また、頼朝主従の逃走は『吾妻鏡』ではどうなっているか。

相模国から房州に逃げる記事は八月二十七、二十八日の条にある。まず二十七日。衣笠城に籠もった三浦義明は平家方に討たれ、子の義澄をはじめ一族は房総を目指して落ちる。北条時政、岡崎義実、近藤七国などが「土肥郷岩浦」から出船し、海上で三浦の一軍と遭遇したと書いてある。

頼朝は翌二十八日に土肥の真名鶴崎から船に乗った。実平が土肥

の住人貞恒（さだつね）に小舟を用意させた。そして次の日、安房国平北郡獵嶋（りょうじま）に上陸した。この島を、千葉県のホームページは安房郡鋸南町竜島とする。謡曲は、西国に落ちるとしているが。『吾妻鏡』は「北條殿以下の人々、これを拝し迎え、数日の鬱念（うつねん）一時に散開すと云々。」と記す。

実平の子の遠平は、頼朝が真名鶴崎を立つとき、御台所政子の元へ使いを命ぜられているので同道していない。また、小舟を用意したという土肥の住人貞恒が同舟したかどうかは書かれていない。とすると頼朝に従ったのは実平一人だったのだろう。この両日に船で渡ったのは、一艘は時政、義実、七国、もう一艘は実平と頼朝で、合わせて五人となる。その家来たちは別にして。『七騎落』に出てくる田代、新開、土屋、土佐坊は『吾妻鏡』に見えないのである。

一人を下ろして七騎にしろと言われた実平はどうしたか。謡曲は謡う。「いづれを選み出ださんと、さしもの実平思ひかね、赤面したるばかりなり。」しかし頼朝は「何とて遅きぞ、急いで舟より下ろし候へ」と急き立てる。仕方なく、七人の中で最高齢の岡崎義実を指す。ところがその義実から、この船中で命を二つ持つ者が下りられよと反撃を喰う。実平が、命二つ持つ者とは？と問うと、自分は長男の与一義忠を石橋山で失った。なのにお主には子の遠平が居るでは無いか。命が二つあるではないかと。このようにいわれてしまった実平は、遠平に降りよというが、遠平は、主君のためなら命を捨てるが、父の命は受けられないと拒絶する。それなら実平自ら下りるという段になって、遠平が折れた。海には敵方が満ちている。その中に割っていって討ち死にし、後代に名を挙げよと父にいわれて。

場面は替わる。一艘の小舟が近づいてきて、乗る者は和田義盛だと名乗り、頼朝の舟を見失い捜しているのだという。たまたまそれが頼朝の乗っている小舟だったので、無事に頼朝、実平と対面した義盛が問う、遠平が見えないがいかがいたしたと。子細があって陸（くが）に残してきたと苦しげに実平が答える。それを聞いた義盛は、船底から遠平を連れ出す。実平は夢かうつつかと喜ぶ。

義盛がいうには、渚での合戦の最中、若武者一騎を捕らえてみればお主の子息遠平だった。そこで生け捕る体を装って連れてきたのだと。「うれし泣きの涙は、うれしなきの涙は、何かつつまん唐衣、日も夕暮れになりぬれば、月の盃とりあえず　主従ともに喜びの心うれしき酒宴かな」と謡い、義盛から「いかに実平、めでたき折なれば一さしおん舞い候へ」と勧められ、「実平正しき忠勤の道に入る、弓矢の家こそ久しけれ」で『七騎落』は終わる。

（『新装愛蔵版　解注　謡曲全集』巻五　中央公論社　昭和六十年刊を参考にしました。

平野文明）

会員投稿

お祭りと神

綿引　進

日本の祭りでは神輿や山車が重要な役割を果たす。祭りは時代や地域によって姿、型はさまざまだが、そこに込められた人々の思いに違いはない。古い祭りは神を迎え、もてなして送ることを主な目的としていた。祭りには五穀豊穣や子孫繁栄、あらゆる厄災を避けたいという願いが込められている。先祖を敬う感謝の気持ちから暮らしの変化によって良縁成就、商売繁盛、天下太平を祈るようにもなった。

祭りの語源には諸説あるが、漢字で「祀り」と書いたこともある。神を祀ること、またはその儀式そのものを指して「まつり」と呼ぶようになったと考えられる。「祀り」は形式にのっとり儀式を執り行い、神や霊を慰める。または祈願することが祭の意味を持つ。神は

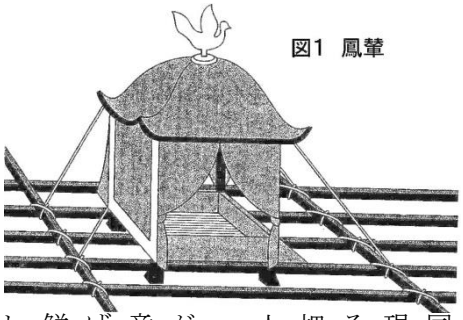
図1 鳳輦

図2 葱花輦

同じ所に居続けると考えずに、必要な所に現れるのを待っていたと考えられている。そのために山や海など神がいそうな所や、畑や村など神を必要とする所で祭りを行い、人々は神が現れるのを待っていたのである。

「まつらふ」という古語を語源と考える説がある。まつらふとは従う、服従するという意味がある。また、献上する、何かを差し上げるという意味がある。神を呼ぶために新鮮な海や山の幸、田や畑の収穫物を供物とし奉った事から転じたと考えられる。

「政」と書いてまつりごとと読む。「おさめる」という意味や領土を統治する意味もある。古代の日本では、祭を司る者と政治を司る者が同一であった。卑弥呼などが知られている。その支配領域において、事の吉凶を決める行為が「政」であり、転じて祭となった。天皇が乗られる輿を鳳輦（ほうれん）図1という。屋根の上に金銅の鳳凰（ほうおう）が飾られているところからそう呼ばれている。複数人で担ぐように担ぎ棒は長い。輿の中では最上級で豪華絢爛な装飾も施されてる。次に葱花輦（そうかれん）図2という輿がある。屋根の上に葱花を飾る。葱花とはねぎ坊主のことで擬宝珠ともいい、格式のある建築物の手すりや橋の欄干に施される。天皇の略儀の行幸時や皇太子、皇后、后妃が乗る。これらの輿が神輿の原型だとする説がある。神輿は神がその鎮座するところから別の所へ移動する神幸の際に使われるもので、字の通り「神の輿」を意味する。

神輿には、四角型、六角型、八角型とあり、四角型が大半であるが、関西型（日吉大社）と関東型（鳥越神社）に大別される。その違いは、鳳凰の尾羽根が関西型は下から上へ、関東型は上から下へと付けられている。屋根は全体を金銅板で被いているのが関西型で黒漆で被いているのが関東型。その屋根に唐破風型、延屋根型、三社型がある。江戸神輿は金ピカで装飾も派手で、四隅の飾り紐も太くいろいろな色が使われている。担ぎ棒も四本あるので多人数で担げる。

地元茅ヶ崎周辺は相模神輿と呼び、黒漆が多く使われている。担ぎ棒は二本。側面にタンスと呼ばれる金具があり、これで音を出しリズムを取り肩を合わせて神輿を揉む。すると四隅の大きな鈴が良い音を出す。関西型、関東型に属さない独特の神輿なのである。

神輿と言えば毎年七月海の日に行われる浜降祭が有名である。より歴史の古い国府祭（こうのまち）（共に県無形民俗文化財に指定）は、相模国一宮寒川神社（寒川町宮山）、二宮川勾神社（中郡二宮町山西）、三宮比々多神社（伊勢原市三ノ宮）、四宮前鳥神社（平塚市四之宮）、五宮平塚八幡宮（平塚市浅間町）と六所神社（大磯町国府本郷）の六社が、五月五日に大磯町の神揃山へ集結し、古式にのっとり座問答の神事を行う。一宮と二宮が終始無言で竹の囲いの中でそれぞれ敷皮を進め、最後に三宮の神官が「先は明年まで」といい神事を終える。五穀豊穣、国家安泰を祈る祭りである。

遊歩道路と潮騒

中島幸子

自動車が風を切って行く国道一三四号は、「遊歩道路」と呼ばれていた。

茅ヶ崎駅のプラットホームに降り立つと潮騒が聞こえたとか、唇をなめると塩辛かったとか、古老の懐かしそうな語り口を耳にするとパステルカラーの薄い水彩画のような風景が浮かんでくる。若者に話しても興味がなくつまらなさそうな顔をしているので、張り合いがない。

文字通り遊歩道路とは、人が歩く道路で、土地の人が呼ぶ俗称である。昭和十年頃、神奈川県の観光地建設構想として、片瀬から大磯まで約十七キロメートルの『湘南遊歩道路』計画が出された。藤沢市・茅ヶ崎市・平塚市・大磯町の海岸線をつなぎ、一帯を公園化するものだったそうだ。現在の茅ヶ崎が全国的にリゾート地として人気を博す礎の一つになったのがこの計画だったそうだ。

茅ヶ崎の区域は、別荘の避暑客が海辺をそぞろ歩いたり、沈む夕日を眺めながら涼風を感じる穏やかな贅沢な時間が流れていた。ときに車が走っているだけで、それが話題になったという。今や当時の老人たちの郷愁は、暴走族のオートバイのレースレーンという次元に移行されてきた。

それでも変化は緩やかであった。昭和四十年代ゴルフ場を囲む松の木々越に、間を置いて一台また一台というように背の高い車がのんびりと走って行ったものだった。それがまるで温泉場の射的屋の猛獣が動いているようで、おもしろがったものだ。

遊歩道路の名を知らない者たちは、一三四号は誕生以来四車線の立派な道路だと思っているらしい。射的屋の猛獣の話などうっかりするとアフリカのことかと言うだろう。

唇をなめると塩辛いという話もやってみようと言うかもしれない。

事業の報告

文化祭に参加

写真展　相模国修験道の聖地を訪ねて

羽切信夫

平成二十八年度の茅ヶ崎市文化祭は、茅ヶ崎市・茅ヶ崎市文化団体協議会主催、茅ヶ崎市教育委員会後援で、十月から十一月にかけて行われました。茅ヶ崎郷土会も「相模国修験道の聖地を訪ねて」をテーマに、十一月五日（土）・六日（日）の両日、茅ヶ崎市民文化会館の展示室で、写真を主にした展示会を行いました。

展示した写真パネルの一枚

昨年度、茅ヶ崎郷土会は七回にわたり、県内の修験道の聖地を訪ねる史跡めぐりを行いました。その折々に会員が撮影し、収集した資料などをもとにして取り組んだ展示会でした。

神奈川県内には、大山をはじめ箱根山、日向山、八菅山などの修験道の聖地がありました。修験道は深山幽谷のなかで歴史を重ねてきました。修験者（山伏）は俗人が容易には近づけない高山や厳しい自然の中で修行を積み、悟りを目指しました。このような修験道は神仏習合の信仰形態として長い歴史を持つものでしたが、明治五年に発せられた修験宗廃止令によって、ど

こも大きく姿を変えてしまいました。しかし、修験道が関係して建てられた石碑などが今も各地に残っています。また、小田原市板橋の量覚院や愛川町の八菅神社では、修験道の火祭りを復活させて、今も毎年行っており、見るべき行事、訪れるべき場所に事欠くことのない一年間でした。

展示場に設置したコーナーの主なものは次のとおりです。

○日向山宝城坊（伊勢原市）、○秋葉山量覚院（小田原市）、○八菅神社（愛川町）、○大山阿夫利神社と修験道（伊勢原市）、○箱根神社と松原神社、○霊山信仰の石造物（県内各地）

これらのコーナーの中に、明治期に姿を消した市内の修験寺院の普賢寺（香川）と宝沢寺（芹沢）も取り上げました。開催した二日間とも、同じ展示室で、友好関係にある茅ヶ崎文化人クラブの展示会と一緒でした。そのようなことから多くの方々においで頂きました。皆様方に「相模国修験道の聖地」の一端に触れていただきましたことは、茅ヶ崎郷土会といたしまして大きな喜びでした。ご来場頂きました皆様および展示会にご協力頂きました皆様に深く感謝を申し上げます。

四十四回　茅ヶ崎市郷土芸能大会

平野文明

十一月二十七日（日）十二時、市民文化会館入口の階段上で円蔵の祭囃子の触れ太鼓が響いた。一回目の年におぎゃあーと産まれた人はいいおっさんかおばさんになっている。それほど続く催しだ。

私が以前に見たのは十年前。久し振りに客席に座った感じがどうだったかというと、舞台レベルがダントツに上がったなという思い。午後一時から始まって四時までぶっ続けの十四演目はどれも感動モノの連続。大ホールの有名演歌歌手がン万円の席料ならナン千円の入場料を取ってもひけをとらない。と思う。

まず凄かったのは若い人。幼児・小学生・中学生・高校生・女子大生（かな？）が出ていたのが六舞台。若い人はパワーが違う。見ている方も元気になる。

野菜と宝船の抽選

青木会長（右）と小澤副会長

次にお年を召した善男善女。これは聞かせる。わざの冴えに加えて声量は若人にちっとも劣っていない。老若男女、日ごろの練習の成果が存分に出ていた三時間。ことに若い人たちの打つ太鼓のばちがそろっていたのはみごとだった。

この芸能大会は、市教育委員会が茅ヶ崎郷土芸能保存協会に委託して毎年開いている。我が茅ヶ崎郷土会も、保存協会の役員を掛け持ちして大会を下支えしている。このコンビネーションも長続きの基のようだ。最後の舞台幕が下りてから、保存協会副会長の小澤勝重さん手造り野菜十数袋と、元副会長　斎藤茂吉さん手造りの宝船四艘の抽選会があり、青木昭三会長の進行でずいぶん盛り上がった。

出演団体は次のとおり　県立茅ヶ崎高等学校文楽部・茅ヶ崎民話の会・茅ヶ崎レクリエーション協会・南湖餅搗唄保存会・南湖麦打唄保存会・芹沢焼米搗唄保存会（焼米搗唄とササラ盆唄）・上赤羽根太鼓保存会（上赤羽根甚句と祭囃

子）・圓蔵祭囃子保存会（祭囃子と岡崎部会のばか踊り）・柳島大漁船上げ唄好友会・柳島エンコロ節保存会（柳島エンコロ節とお座敷甚句）の十団体で十四演目。演目の一部を郷土会会員　坂井源一さん撮影の写真で紹介しよう。

茅ヶ崎高等学校文楽部　「寿式二人三番叟」

茅ヶ崎民話の会　「千の川物語」

レクリエーション協会　「茅ヶ崎ふるさと音頭」

南湖餅搗唄保存会「餅搗唄」

圓蔵祭囃子保存会岡崎部会「ばか踊り」

市指定重要文化財
南湖麦打唄会「麦打唄」

市指定重要文化財
芹沢焼米搗唄保存会「焼米搗唄」

上赤羽根太鼓保存会「上赤羽根祭囃子」

市指定重要文化財
圓蔵祭囃子保存会「圓蔵祭囃子」

柳島大漁船上げ唄好友会「大漁船上げ唄」

市指定重要文化財
柳島エンコロ節保存会「柳島エンコロ節」

これからの行事予定

①1月11日（水）市内史跡めぐり　9時茅ヶ崎駅改札前集合
「中世の石碑を訪ねて」　今宿―塔の越の宝塔・萩園―常顕寺の宝篋印塔と五輪塔・浜之郷―龍前院の五輪塔十基

②1月18日（水）勉強会　13時30分から　場所未定
「茅ヶ崎の弥生時代」富永富士雄さん

③1月27日（金）市外史跡めぐり　8時50分茅ヶ崎駅改札前集合
二七八回　相模のもののふたち（5）「岡崎氏と土屋氏」（平塚市）

④2月15日（水）勉強会　13時30分から　文化会館３Ｆ第一会議室
「茅ヶ崎の寺社⑧―伊勢信仰（一）」平野文明

⑤2月22日（水）市内史跡めぐり　9時茅ヶ崎駅改札前集合
「室町時代　善光寺式阿弥陀三尊と日蓮坐像」今宿―上国寺の日蓮聖人坐像・信隆寺の日蓮聖人坐像・西久保―宝生寺の善光寺式阿弥陀三尊像

⑥3月15日（水）勉強会　13時30分から　場所未定
「茅ヶ崎の奈良・平安時代」富永富士雄さん

⑦3月25日（土）市外史跡めぐり　8時50分茅ヶ崎駅改札前集合
二七九回　相模のもののふたち（6）
「和田氏と三浦氏最後の新井城址」（三浦市など）

問い合わせ　源　邦章　０８０―６７８４―３０８８
平野文明　０９０―８１７３―８８４５

【編集後記】

十二月十六日、この冬一番と言われる冬将軍がやって来た。本当は来て欲しくないものの一つだ。家に籠もってこの一三八号の割付けに追われた。来ては欲しくなかったものに、今年は、四月熊本と十月鳥取の両県に来た地震があった。まだ復旧事業が続いている。早く終了して、皆さんに元の生活が戻りますように。

平成二十九年、今年こそは、私たちを元気にしてくれるものがやって来て欲しいと願っております。

（編集員一同・平野記）